
裁断のイニシエーション

公彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

裁断のイニシエーション

【Nコード】

N4576N

【作者名】

公彦

【あらすじ】

猪狩康平たちの住む街ではある連続殺人事件が起きていた。首なし死体でもない。密室殺人でもない。孤島でも吹雪の山荘でもない。不審な点はない。しかし、現場には奇妙なある物が残されていた。

登場人物

- ・猪狩康平 いかりこうへい ○大三年
- ・矢式奈美香 やしきなみか ○大三年
- ・藤根基樹 ふじいもとぎ ○大三年
- ・新川怜奈 にいかわれいな ○大三年
- ・哀澤俊彦 あいざわとしひこ ○大准教授
- ・木村良知 きむらよしみ ○大准教授
- ・中井夏美 なかいなつみ H大三年
- ・伊東誠 いとうまこと 会社員
- ・伊東葉月 いとうはづき 主婦。誠の妻
- ・六本松美智子 ろっぽんまこみちこ IT会社社長
- ・六本松信太郎 ろっぽんまつしんたろう IT会社副社長。美智子の夫
- ・橋本直美 はしもとなみ H大四年
- ・橋本勉 はしもとつとむ 直美の父
- ・真田加奈 さなだかな H大四年
- ・伊勢浩太郎 いせこうたろう 刑事
- ・池田 いけだ 刑事

一章 何でしょっぴく？ What's happened? (前書き)

地名は全く架空のものです。

一章 さて、何でしょう？ What's happened？

1、

「何か参考になるものはあるかな？」猪狩康平の指導教官の哀澤俊彦は言った。

月曜日。ここは哀澤の自宅、あるマンションの一室である。論文のための参考資料を借りるために猪狩が訪れた。

「そう、ですね……」猪狩は歯切れ悪く言葉を濁して言った。

「でしょ？ だから言ったのに」哀澤は白い歯を見せて笑った。

「僕はね、O大の中でも希少な理系の人間なんだよ。さらに言うなら情報学ね。」

文系大学の中にあつてうちの学科はちょっと理系っぽい。情報システムをビジネスに生かそう、みたいな学科だからね。そのためのコンピュータによる分析とかを行うためにプログラミングとかを教えているんだけど、やっぱり理系の学生と比べると覚えが悪いというか、拒否反応が強いというか。だから授業では基礎しか教えられない。けど基礎だけ教えても研究に役立たない」

そう言つて苦笑いする。

「だからもつと勉強してみたいっていう学生がたまにいるんだよ。君みたいに」

「はあ」猪狩は頷くしかなかった。

「けど元の人間は文系だから、僕の所に来てもちんぷんかんぷん、わかりませんつてなつちゃう。そりゃそうだよ、C言語の基礎しか知らないんだもん」

「すみません。言い返せません」

「いやいや、怒つてないよ。誰だつて最初は知らない。理系の人だつて最初は知らない、僕だつてわからなかった。これつて当たり前のことだよな？ これから覚えればいいのさ。」

けどね、僕が言いたいのは、プログラミングに夢中になつて学部

本来の目的を忘れてませんか？ って事。ちゃんと経済・経営の勉強をしようよ、って僕は思うんだけど」

「耳が痛いです」猪狩がそう言うのと哀澤は声をあげて笑った。

「ごめんごめん。そうだな、例えばビジネスにおけるWeb推奨システム、これなんかは立派に経営の話だね。けどこれにはやっぱり情報系の知識が必要だし、興味があつたら勉強してみるのもいい。こういうののために文系の大学にわざわざ僕みたいな理系の人間がいるわけだよ。さて、話が長くなったね。何か持っていくかい？」

「そうですね、じゃあこれを」猪狩は一冊の本を手にとった。

「うん、プログラミングの基礎だね」

○大では学生の自主的な学習の奨励と称して「学生論文賞」というものを行っていて、優秀な論文には賞金が出るらしい。哀澤ゼミでは三年生のうちから応募している。うまくいけば四年生時の学生論文賞、さらには卒業論文へと繋がっていく。そのため、将来への投資だと思えばまだ救いがあるが、何しろ論文については右も左もわからない。せいぜい授業レポート程度しか書いたことがない猪狩には苦痛ともいえるものだった。

ため息交じりに部屋を出ると何だか騒がしいことに気づく。下を覗き込むとパトカーが見え、猪狩はもう一度ため息をついた。ため息をつくときと幸せが逃げる、と幼いころ母に教わったが、年々数を増すばかりである。そう言えば先日母に注意されたばかりである。なぜこうもため息をつきなくなるのだろうかと思うともう一度ため息が出そうになったが、今度は我慢した。

どうやら二つ下の六階で何かが起きているようだ。いつもの猪狩なら無視して帰宅するところだが、どういふ風の吹きまわしか様子を見てみようと思った。どうやら、事件に慣れすぎて焼きが回ってしまったらしい。やはり、猪狩はため息をついた。

2、

伊勢浩太郎は重い足取りで愛車から降りた。瞬間に汗が噴き出し

てくる。車のエアコンをかけ過ぎたと思った。避けることのできない反作用だ。上着を脱ぎ車内に置いておく。

もう既に午後六時半を過ぎている。北海道も暑くなったものだ。というより、最近は異常に暑い。まだ六月の終わり、本州ではどうだか知らないが、やはり七月にならないと夏だと思えない。(夏至は六月だが)

地球温暖化というやつか。まったくもって迷惑な話だ。とはいえ、自分自身温暖化に貢献しているのは否めない。他人事ではないが、スケールがでかすぎて他人事のようにだ。

自分みたいなやつがたくさん集まって、社会を形成しているのだから、環境問題が解決しないのも頷ける。どこぞの自動車大国を見れば一目瞭然だ。

せめてエアコンは節約しようか。あれは電源を切った時の反動が大きすぎる。エアコンの効いた空間から一步外へ踏み出した時のもわつとした感触がたまらなく嫌いだ。これなら一石二鳥だ。

……ずいぶん勝手な考えだな。

伊勢は自分の思考を戒めた後、気持ちを仕事に切り替えた。

ここはあるマンションの前、すでに野次馬が集まりつつある。

その野次馬をかき分けて玄関に入ると“伊原マンション”という名が目についた。おそらくオーナーが伊原という名前なのだろう、あまりに安易過ぎる。

このマンションはそれほど新しくないので、セキュリティが万全というわけではないようだ。玄関のすぐ横に管理人室があるが、居住者でなくとも簡単に通れるようだった。

「被害者は？」伊勢は部下の池田に質問した。

「伊東誠二十五歳、会社員。頭部を殴打されたようです」池田は手帳を手際よく開き、お望みの箇所を見つけ出した。

「第一発見者は？」

「妻の伊東葉月です。二十四歳、若妻ですよ」池田は鼻の下をだらしなく伸ばして言った。彼は面食いなので相当な美人なのだろう。

ついでに言っと、自分の力量をわきまえないから、当分彼女はできないだろう。

「その表現をやめる。何か卑猥だ」

「卑猥だと思う伊勢さんの方が卑猥だと思いますよ」池田はニヤニヤと伊勢の方を見た。

伊勢は池田を睨んで黙らせた。

「で？　どういう状況で発見したんだ？」伊勢は気を取り直して聞いた。

「あ、は、はい」池田は伊勢の睨みに少し怯んだようで、慌てて手帳を見直す。一つ咳払いをしてから答える。

「彼女は友人たちと土・日・月と二泊三日の旅行に行っていたらしいです。今日は有休をとったそう。それで自宅に帰ってきたところを発見したと」

「彼女はいつ戻ってきた？」伊勢は手袋をはめながら質問を続ける。「五時頃だと言っています。直後に通報したようですね」

二人は現場の部屋に到着した。まず玄関の小奇麗な花瓶が目に入る。これは何の花だろうか、伊勢は興味がないのでわからなかった。玄関を抜けてリビングに入ると真新しいテレビ、おそらく地デジ対応だろう、羨ましい。全体として整頓が行き届いている印象を受ける。

そして被害者はリビングの右奥、寝室の中に倒れていた。今はシートが掛けられている。

「……見事に陥没してるな」伊勢はシートをめくり、被害者の状態を確認すると顔をしかめた。顔の右側が陥没している。どうやら正面右寄りから殴られたらしい。

「死亡推定時刻は？」今度はすぐそばにいた監察医の本川に話しかけた。

伊勢より十は上で眼鏡と口髭がトレードマークの中年男。

「毎回毎回、検死を待てねえのか。そうだな、ざっと見昨夜の十時前後一時間って所か。」本川は頬を指で引っ掻きながら面倒くさそ

うに答えた。

「ありがとうございます」そう言うと伊勢は再び遺体を見た。

Tシャツにスウェットという完全な部屋着状態。六階だから窓からの侵入は不可能。寝室に倒れていた事からも顔見知りの犯行だろう。何か口論になってカツとなつてやった。ありきたりなストーリーが思い浮かんだ。

「……ん？」伊勢はスウェットのポケットに何かが入っているのに気が付いた。

それはカルタだった。“い”の取り札、犬の絵が描かれている。

「なあ、“犬も歩けば棒に当たる”って上方カルタだったか？」

「え？ 知りませんよ、そんなの。どうかしたんですか？」池田は突拍子もない質問をした伊勢を訝しげに見た。

「いや、いい」伊勢はそのカルタを鑑識に渡した。「奥さんに話を聞こう」

被害者の妻、伊東葉月はリビングで俯いていた。長袖カーディガンに長めのスカート、おしとやかな雰囲気がある。染めていない真っ黒で、肩を優に超える長さの髪の毛が日本人形のようにだった。

彼女はずつと下を向き、それこそ人形のように動かずにいた。だが、人形のような可愛らしさはない。悪く言えば蠟人形のように表情が硬い。とにかく悲しみに暮れているだろうとはわかった。

「奥さん、この度のご不幸、ご無念のほどをお察しします」

「……悪い夢を見ているようです」葉月は伊勢の方をチラリと見た後、再び俯きそのまま答えた。

「我々もできるだけ早くご無念を晴らせるように努めていきます。そのためにも奥さんの協力が必要です。少しお話を伺ってよろしいでしょうか？」

「……はい」少し間が空いた後、ゆつくりと答える。

「ご遺体を発見された時の状況をお伺いしてよろしいでしょうか？」

何でも友人と旅行だったとか

「ええ、大学時代の友人と函館に一泊したんです。それで今日の夕方、五時頃に帰ってきたんです。そしたら鍵が開いていて、誠さんがいるのかなと思っただけですけど妙に静かで、それで……」

「ご主人の死亡推定時刻は昨夜の九時から十一時頃です。その頃はもちろん函館ですよ。あ、いえ、関係者には全員聞かなくてはならないんです。お気を悪くなさらないで下さい」伊勢はあらかじめ釘を刺してから質問した。

「大丈夫です」彼女はそう答え、もちろん函館にいたとも答えた。

「わかりました。では、ご主人の交友関係で何か揉め事があつたりはしないでしょうか？」

「私の知る限りではありません。活発で人付き合いの良い人でしたから……」

玄関の方で警官の大声が聞こえてきた。

「関係者以外は入らないでください！」

「どうやら、野次馬らしい。ここの住民だろうか。ところが、聞いたことのある声が聞こえてきた。」

「いや、まあ、入る気はないですけど」

その声を聞いて伊勢は玄関へと向かう。案の定、数か月ぶりの顔がそこにあつた。

「やあ、猪狩君」伊勢は笑顔で挨拶をする。その後で、殺人現場で笑顔とはなんと場違いだろうという事に気づく。

「ああ、こんばんは。伊勢さんがいるって事は殺人事件ですか？」

猪狩は部屋の中を覗き込むようにして聞いた。この部屋は玄関からリビングまで見ることが出来る。状況を観察しているようだ。

「うん。言っておくと、密室じゃないよ」伊勢は冗談めかして言った。それから、これも場違いだと反省。猪狩が伊勢の方を見た。心なしか睨んでいたようにも見える。

「……知り合い同士、口論になってカツとなつてやった。そんなところですか？ 不審者の侵入には見えませんが」猪狩は伊勢の肩口に部屋を覗き込んだまま聞いてきた。

「どうしてそう思う？ まあ、その辺で検討はつけているけど」
「いや、まあ、いろいろと」猪狩は言葉を濁した。「じゃあ、頑張
って下さい。帰ります」

猪狩は頭を下げた。帰っていった。

3、

伊勢は被害者の左隣の部屋のインターフォンを押した。“紀伊”
とある。

「はい」

「すみません、北海道警察の者です。少々お話を伺いたいのですが」

「……ちよつと待ってください」

しばらくしてほんの十センチほど扉が開いた。警戒しているよう
だ。四十代ほどの女性が覗いている。

「伊勢と申します。お話よろしいでしょうか？」伊勢が警察手帳を
見せると、女性はやや警戒を解いたようだ。つまり、警察を装った
詐欺でも想像したのだろうか。だとしたら手帳も疑ってかからなく
てはいけないだろうに。しかし、それを気にしている場合ではない。
「あの……何かあったんでしょうか？」彼女は隣の部屋が慌しいの
を見て、不安げに質問した。

「実は隣のご主人が何者かに殺害されて」言った途端に、紀伊
の顔がみるみる青ざめていく。

「そんな……」

「伊東さんとご交流は？」

「いえ、あのご夫婦、一年くらい前に引越してきたんですけど、
その時に挨拶に来られた時くらいしか……」

「そうですか。では伊東さんの親交関係とかも」

「全く存じ上げません」

「わかりました。では昨夜の九時から十一時の間に不審な物音を聞
いたとかはありませんでしょうか？」

「いえ、私は……ちよつと待ってください。主人と息子に聞いてき

ますので」「そう言うと紀伊は家の奥へと向かって行った。しばらくすると彼女が戻ってきた。

「すいません。二人ともわからないそうです」「彼女は申し訳なさそうに頭を下げた。

「わかりました。ありがとうございます。何か思い出したらご連絡下さい」「礼を言って伊勢と池田はその部屋を後にする。

何も収穫がなかったが、気を取り直して右隣の部屋を訪ねる。今度は“東野”だった。“紀伊”“伊東”“東野”、まるでしりとりだ。

三十ほどの男が出てきた。

「何すか？」男は不機嫌そうに言った。

伊勢は先ほどと同じように手帳を見せて名乗った。

「……隣で何かあったんすか？」東野は警官だらけの隣家の様子を見て訝しげに言った。

「伊東さんのご主人が何者かに殺害されたんです」

「へえ……」東野はやや眉を吊り上げたが、さして興味がないように淡々と言った。「もしかして、昨日の十時くらいすか？」

池田が「えっ!？」と声を上げた。この程度の情報で驚いているようでは池田もまだまだだ、と伊勢は部下の精進を願った。

「何かご存じですか？」

「ん？ いや。ただ十時くらいに隣で大きな物音がしたからさ」

「物音、ですか？ どんな感じでした？」

「さあ、あんまり興味なかったからな。このマンション、防音しっかりしてるから何の音かまでは分かんないっす。それに、ちょうど見たい番組が入るところでさ」

どうやらこのマンションの住人は社交性に欠けるらしい。隣人とすら会話を交わさない、隣で大きな物音がしても興味を示さない。これは現代の日本全体に言える事だろう。隣人の顔・名前を知らない人間はめずらしくないらしい。

二人は礼を言うと、その階の他の部屋もまわったが目ぼしい情報

は得られなかった。

「犯行時刻は十時頃、これしかわかりませんでしたね。目撃情報もなかったですね」池田はがっかりした様子で話す。

「もう一つ。被害者は“活発で人付き合いの良い人”だったとは限らない」

「え？ 何でそんな事言えるんですか？」池田は首を傾げる。

「暑いな、今日は」

「はい？ ……暑いですけど」池田は目を丸くし、そして言われて思い出したのか、ハンカチを取り出して額の汗を拭いた。

「伊東葉月の服装は？」

「え、カーディガンにスカートだったと思いますけど。二十四ですよ？ もっとミニでも……。美人だし」池田は鼻の下を伸ばしてだらしなく微笑んでいる。にやけている、と言った方が正しい。

「阿呆。長袖は暑過ぎると思わないか？」そういう二人は上着を脱ぎワイシャツを捲くっている。できるならばネクタイも緩めたい、今日はそれくらいの気温である。

「まあ、言われてみれば……。でもあれって夏物ですよ？」

「確かにそれだけじゃ説得力がないがな」

「何がですか？」

「お前はもつと観察力を付けろ。よく見ると袖の下にアザがあった」

「アザ、ですか？」

「ああ、あれは DV の痕だ」

「え？ 本当ですか！？ ……でも葉月は函館にいたんですよ？」

十津川警部もびっくりのアルバイトリックを用意しないと無理ですよ！」池田はそう叫んだ。友人が共犯ならできなくもないが、さすがに距離が離れすぎている。往復で何時間かかるだろうか。空白の時間が多すぎる。

「わかってる。彼女はシロだ。だが、そういう裏の顔があるという事は他にもその“裏の顔”の被害を被っている人がいるかもしれない。確かにこういう輩は、外では“表の顔”を貫き通す傾向にある

が、“裏の顔”があるというだけで疑う余地は生じるさ」

「なるほど、わかりました！ 被害者の周辺洗ってみます」池田はそう言つてエレベーターの方へ駆け出して行った。

伊勢は署に戻ろうと歩き出す。何となく階段から降りて行った。車に乗り込むと一息ついた。もう辺りは暗い。

そして、ふと思い出す。

「……“犬も歩けば棒に当たる”は江戸カルタだ」
そして上方カルタの“い”は、

一寸先は闇

二章 さて、何処でしょう? Where was she from?

1、

「うーん。何て言うか、背景がわからないよね」

次の週の木曜日、つまり哀澤の部屋を訪ねてから（さらには殺人現場を見てから）二回目の木曜日、ゼミの日である。七月に入り、暑さは厳しさを増すばかりである。

猪狩はとりあえず即席で考えたテーマを発表したところだった。

一人ずつ発表し、猪狩が最後なのでこれで今日のゼミは終わりである。

「なぜそのテーマを選ぶに至ったか、というか、なぜそれをしなくちゃいけないのか。つまり、それを研究して誰が喜ぶか、何の良い事があるかというのが少しわかりにくい。」

問題点はうまくまとまってると思うよ。だけど、背景がわかりにくいから、必要性がちょっと分かんない。さらに言うなら、アプローチ方法も深く詰めないと後で困りそうだね」

難しい。わかるのは「要するに駄目」という事だ。

今年に入ってゼミで論文のための発表を数回行ったが、十人のゼミ生全員がまだOKをもらっていない。なかなかハードルが高い。ハードルの設定が棒高跳び基準ではないかと疑ってしまう。

「ま、頑張つて。それじゃ、解散」哀澤がそう言った事でゼミはお開きとなった。今日は何とか時間内に終わる事ができた。

というのも、このゼミは時間をオーバーするのが常である。原因は詰め込みすぎ。毎回全員が発表するのには無理があるのにもかかわらず、無理矢理やるものだから、一時間以上過ぎるのは当たり前になってしまっている。今日はたまたま欠席者が多かった。

猪狩が授業棟を出るとそこで矢式奈美香に出会った。どうやら待っていたようである。

「二人は？」猪狩が尋ねる。二人とは藤井基樹と新川怜奈の事であ

る。

「さあ？ 私も今終わったところだし」

猪狩と奈美香、そして藤井と怜奈の四人はよく一緒にいる気の知れた仲である。猪狩は奈美香とは幼馴染だし、藤井とは高校が同じだ。怜奈とは大学に入って知りあった。

この構図だけ見ると猪狩の周りに人が集まっているように見えるが、たまたま偶然、どういうわけかはわからないが、少なくとも猪狩にそんな人間収集力はない。猪狩はそう自己分析している。

藤井は高校の時に話しかけられたのがきっかけであって、自分本位ではない。（奈美香との接点は知らない）怜奈は奈美香経由だ。そこに猪狩と奈美香の接点があって四人になった、それだけである。二人は歩きなれた坂道を下る。〇大は山を二キロほど上った先にあるので、上りは寒い日でも汗をかくほどである。では下りが楽かと言えば、そうでもない。下りは無意識のうちに体にブレーキをかけているのでその分疲れるのだ。

小学校の登山遠足でも猪狩は下りの方が嫌いだった。上りももちろん嫌いだった。さらに言うなら根本的に登山遠足が嫌いだった。

「何か憂鬱そうね」奈美香が口を開いた。

登山の話ではないだろう。そんなに表情に出なかつたはずだ。それならば目下一番の悩みはゼミである。

「ゼミが、やばい」猪狩は素直に答えた。猪狩はほとんど意地を張る事はない。それにより感情を表に出さないが、よほど苦しそうに見えたのだろう。

つまり、それほど切羽詰っているという事である。

「あんたでも苦手な事ってあるのね」奈美香はくすぐられているかのようにクスクスと笑った。

「苦手な事の方が多い」

「勉強の話よ」

「知らないんだから仕方がない。“いろは”がわかれば問題ない」

「あ、そう。頑張ってるね」奈美香は微笑んだ。それは若干、馬鹿に

したような感情も含まれていたように思える。「そもそも、そんなに苦しむなんて何のゼミなの？」

「哀澤ゼミ」

「何やってるゼミなの？ 経営情報学科でしょ？」

「O大は単科大学で学部は一つしかないが、学科が四つに分かれている。経済学科、商学科、法学科、そして猪狩の所属する経営情報学科。ちなみに奈美香は商学科である。」

「わからない」

経営情報学科はまわりからみると何をやっているのかわからない。実のところ中にいてもよくわからない。O大のホームページの言葉を借りれば「現代社会の複雑な問題を把握し、情報技術を駆使して最適な解決法を探る」ための学科らしい。そのためかよく言われるのは「パソコン学科」だが、パソコンを使う授業はそれほど多くない。

ゼミも似たようなもので、特に哀澤ゼミは活動内容が不明瞭である。

「わからないって……」奈美香は猪狩がいい加減に答えていると思っただのか（実際、真面目に答えている）呆れながらも猪狩の方をやや睨んでいる。

「先生の専門はソフトウェア科学。コンピュータ関係だね。Webネットワークとか」

「なに？ そんな理系チツクな事やってるわけ？」奈美香は目を見開いた後、顔をしかめた。

「いや、全然。やりたかったらやってもいいけど、って感じ。テーマは自由なんだ。普通に経済・経営の勉強をしてもいい。でも逆に自由すぎて不自由だ。何やっていいかわからない」

これが哀澤ゼミの不明瞭さ、そしてつらさの所以である。

人間、ある程度縛られないと生きていけない。自由自由と言いながらどこかで不自由を求めているのだ。何かしらの指針がないと不安で仕方がない。

真の意味での自由とは砂漠の真ん中に放り出されるようなものだ。「ふうん」奈美香は既に興味を失ったようだ。もともと興味などなかったかもしれない。

二人はJRに乗り込んだ。電車に揺られて四十分、S駅で地下鉄に乗り換える。市の名前を冠するS駅はもちろん街の中心で、今は帰宅ラッシュの真っ只中である。

こうして行き交う人を見ると駅は工場のように見える。

人々は部品だ。仕事というベルトコンベアに乗せられて、社会という製品を造るための部品。バラバラに動いているようで出口は一緒、自分の役割を果たすために歯車の如く機能を発揮しているのだ。自分はどんな部品なのだろうか。猪狩はそんな事を考える。

どうせ自分は大した部品ではない。少なくとも今は。無駄に多い一本のネジ。コストカットで真っ先に外されるようなどうでも良い存在。

社会に出れば少しはまともな部品になれるのだろうか。

地下鉄を降りると後は自転車で帰るだけである。二人が駐輪場に向かったとき、猪狩はある一帯が騒がしい事に気が付く。どうやら近くの公園のようだ。

「何かしら？」奈美香も気づいたようだ。

「さあ？」猪狩はそれしか言わなかった。嫌な予感がしたからである。その予感は一つつある。

「行ってみましょう」「一つ目。

猪狩は黙って奈美香に続いて歩いた。近づいてみると、あまり歓迎すべき事態ではないという事がわかる。人々の表情がそれを物語っている。どうやら二つ目も当たりそうだ。何か事件があったに違いない。怪我人か病人か。

「……ああ」猪狩はそこで言葉を切った。最初は怪我人に見えた。だがすぐにそうではないと直感する。あれは「死んでいる」

2、

伊勢は車を降りた。どうにも足が進まない。どうやら自分の足は歩く事を忘れつつあるようだ。まだ、先日の事件も捜査が始まったばかりだというのに、またもや他殺体だという。これが憂鬱にならずにいられようか。

野次馬を掻き分けると池田が目に入る。

「どうだ？」

「第一発見者は近所の子供だそうです。死亡推定時刻は昨夜八時前後。この公園は相当利用者が少ないようで、子供も滅多に利用しないようです。おまけにあそこで見つかったんですよ」池田が指した方向には二台のすべり台を繋ぐトンネル状の遊具があった。「ずっと見つからなかったんですね」

伊勢は運び出された被害者の顔を覗き込んだ。後頭部を殴られたようだ。それにしてもどこかで見た事のある顔だ。どこだったろうか。

「被害者の身元は？」

「六本松美智子、四十八歳。シックスパイン・ネットワークの女社長ですよ」

そうだ、最近話題のIT企業の社長だ。珍しく東京ではなく北海道S市に本社を置き、この不況の中にあって創業数年で黒字転換、その後も増収を続ける注目企業としてTV出演も数多い。

「でも何でパインなんですかね？ シックスはわかりますけど」池田は首を傾げた。

「松は英語で pine だ。 pine apple の略式としての方がよく使うが、そもそもパイナップルは形が松かさに、味がリンゴに似ている事から、 pine と apple をつなげてできたという説が有力で、松の方が先だ」

「へえ、そうなんですか。グレープフルーツなら知ってましたけど」感心する池田をよそに伊勢は遺体を観察した。上着のポケットからカードのようなものが飛び出ているのに気が付いた。その瞬間鼓動

が高鳴る。

「論より証拠、か」

「何か言いました？」池田が尋ねたが、伊勢は首を振る。池田は不思議そうな顔をしたが、それきりだった。

それはカルタだった。江戸カルタの“ろ”、“論より証拠”である。

何の意味がある？ 伊勢はしばらく考えにふけた。

伊東誠、六本松美智子。“い”と“ろ”だ。では次は“は”なのか。

やはり偶然ではないだろう。おそらく同じ犯人だ。

ふと思いついて公園を出て周りを見渡す。この一帯は南北に走る地下鉄の駅を境に西は住宅街、東は飲み屋街とはつきりと二分されている。もちろん線路は地下にあるのではつきりとした境界はないが、商業ビルなどがちょうど間に入り、大まかに区切られている。しかしこの時代、飲み屋は街の中心に客足を取られているようで、どこも寂れていた。これならばほぼ一日見つからなかったのも頷ける。そして彼は公園の看板を見た。

“ろくさく 禄里あおぞら公園”

伊勢はこんな狂った事を考え付いた犯人にある意味脱帽した。

名前だけではなかった。発見された場所も掛けてある。最初は“伊原マンション”、次は“禄里あおぞら公園”、“い”と“ろ”である。

しかし何のためにカルタを置いておく必要がある？ 何かのメッセージだろうか。そもそも殺された二人には何の関係がある？

「伊勢さん」考えあぐねていると聞き覚えのある声が聞こえた。

「ああ、こんにちは。いや、こんばんは、かな？ 矢式さん」

伊勢の挨拶に対して奈美香は笑みを浮かべてお辞儀をした。

「事件ですか？」奈美香の後ろから別の声が聞こえる。無愛想でぶっきら棒な声だ。

「やあ、猪狩君」伊勢は笑顔で挨拶をするが猪狩は軽く頭を下げた

だけだった。再び奈美香の方を見ると好奇心に満ち溢れた子供のよ
うな目でこちらを見ていた。

「殺人事件がね、あつたんだよ」伊勢がそう言うと奈美香の目は一
層輝きを増したように思えたが、実際に目は輝いたりしないのだろ
う。

「そうなんですか。あ、いえ。いくら私でも関わっていない事件で
出しゃばったりしませんよ。でも私たちの知恵が必要ならいつでも
言ってくださいね」そう言って悪戯っぽく微笑んだ。「ね？」

「え、何？」奈美香に同意を求められた猪狩は現場の方を見ていて
聞いていなかったようだ。奈美香は猪狩を睨みつけた。

実際のところ二人の推理力には目を見張るものがあるが、一般人
に協力を求めるなど本来あってはいけない。

今までの事件だって彼らが関係者であつたからこそであつて、そ
れもこちらとしてはかなりの後ろめたさを持つていた。というより
上にはれたら大変な事になる。今回協力を求める事はしないだろう。
だが、気になるのはあのカルタだ。あれがあるのとないのでは大
きく違う。あれには何か意味がある。今わかっているだけで、個
々の殺人事件を連続殺人事件に変えた。これからあのカルタはどれ
ほど自分たちを縛つていくのだろう。

そう考えたところで馬鹿馬鹿しくなつてきた。確かに不思議だが
単なる偶然で済ます事ができなくもない。連続殺人である根拠はな
い。今までどおり現場から証拠を見つけて、被害者の周辺を洗つて、
容疑者のアリバイを崩せばいい、それだけだ。

「あの……伊勢さん？」伊勢が考えにふけつてしていると奈美香が不思議
そうに見つめてきた。

「ああ、なんでもない。ま、何かあつたら助けてもらおうかな。な
んてね」伊勢は冗談めかして言つたつもりだが、奈美香にとっては
本気に取られたかもしれないと思つた。

「もちろんです！ じゃ、そろそろおいとましますね」

「ああ、勉強頑張つて」伊勢は片手を軽く挙げて見送ろうとした。

そう言うてから、自分は大学時代ちつとも勉強しなかったのを思い出した。

奈美香はすぐに公園を離れていったが、猪狩はまだその場に残った。

「あれ、六本松美智子ですよね？」突然猪狩が口を開いた。遺体はシートに覆われているが、彼はこちらの会話をほとんど聞いていないようだったから、奈美香との会話中に顔を見る機会があったのだろう。

「そうだけど」伊勢は猪狩が彼女の事を知っている事に驚いた。いくら有名とはいえ学生が知っているような人物とは思えなかった。が、彼なら知っていてもおかしくないと思えてきた。

「確か、自宅は南区の豊山ですよね？」

「そうなの？」ここは北区祿里、字の如く南区とはS市の反対側で車でも一時間はゆうにかかる。

「前にテレビで見た事があります。この辺りに用があつたんでしょか？ でもそれにしても車が見当たりませんね」

「……そうだね。車はなかった」伊勢は彼の言葉の続きを待ったが、何もなかった。しかし言いたい事はわかる。

「わかつてるよ。なぜここなのか、だろ？」

「ええ、犯人と共にここに来た、つまり顔見知りの犯行。もしくは、殺されてここに放置された。どちらかだと思いますが、どちらにせよ『なぜここなのか』という疑問が生じます。特に後者は。」

通り魔の犯行だとすれば死体を移動させるとは考えられません。

かといって顔見知りの犯行かと言われれば、わざわざ街の反対側に来た理由がわかりません。車がないという事は犯人の車か地下鉄を利用したという事になりますけど……」

「地下鉄はないだろうね。一流企業の社長だ。これは偏見かな？」

「だとするとなぜ犯人はこの公園に死体を捨てたのでしょうか？ 犯人の自宅がこの付近で、被害者と共にいたのなら、疑いを逸らすためにも被害者の自宅付近に捨てるべきでしょう」

「だな。けど捜査は始まったばかりさ」

なぜここなのか、それにはやはりあのカルタが関わってくる。

「あの、猪狩君……」言いかけて思い直す。「いや、何でもない。気をつけて帰りなよ」

猪狩は少し気にした様子を見せたが、すぐに軽く頭を下げて帰っていった。帰り際に「この間も事件があったばかりなのに、大変ですな」とねぎらいの言葉を置いていった。

「ふう……」伊勢は息を大きく吸い込んで、ゆっくり吐き出した。今、自分は何をしようとしたのだ？ 先ほど考えたばかりではないか、一般人を関わらせてはいけない。それがどうだ、彼の頭脳のほんの一片を垣間見ただけで彼に頼ろうとしている。

刑事失格だな。と自嘲しもう一度ため息をつく。

とにかく、今は自分のできる事をしよう。もしそれで駄目なら……

ほら、また始まった。自覚を持って、伊勢浩太郎。これは警察の仕事だ。

「池田、被害者の住所は？」気を取り直して仕事を再開する。

「えっと、免許証が発見されてます。南区豊山 条 丁目××。ずいぶん遠いですね」

「明日から被害者周辺を洗うぞ。まず被害者の昨夜の行動。車もなしにここまで来るとは考えにくい。地下鉄はあるが、一流企業の社長が使うとは思えない。ま、偏見かもしれないからもちろんそつちでも考えるが。あとは家族・友人からの聞き込みだ」

「そうですね。頑張りましょう」池田は肘を曲げ、右腕を上突き出しガッツポーズをした。今時ガッツポーズはダサく見える。

「今度は“論より証拠”か」池田がいなくなると伊勢は独りごちた。どうも最近独り言が増えている気がする。気をつけなくては。

しかし、カルタになぞった連続殺人。犯人側からすれば何の得がある？ そもそもこの連続殺人という仮説。

何の証拠がある？

3、

翌日、伊勢は六本松美智子の夫、信太郎に会うために彼の自宅を訪れた。猪狩の指摘したとおり、現場とは車で一時間以上も離れた場所にあった。

まず伊勢は信太郎に会うとお決まりの文句でお悔やみを言った。それに対して信太郎もありきたりな言葉で返した。

「本当に信じられません。この無念は警察の方が晴らしてくれと信じています」

信太郎は薄くなった髪に丸顔、丸い眼鏡で鋭い目つきだった。鋭いというのは陰険な意味ではなく、人生を渡り歩いている、成功者の目である。少なくとも伊勢の目にはそう映った。ただ、好きにはなれない。

「そのためにはご主人の協力が不可欠なんです」

「ええ、わかっています。私に答えられることなら、何でも答えましょう」

「我々がまず知りたいのは、彼女がなぜ自宅から離れたあの場所で発見されたのか、です。つまるところ、彼女は何をしていたのか」

「実は……」信太郎はバツの悪そうな顔で歯切れ悪く言った。「実は一昨日はある企業の方と飲み歩いていまして、美智子の行動は全く知らないんです。ああ……、美智子があんな目にあっている間、私は楽しくお酒を飲んでいたんですよ！」彼は自虐的に言った。

伊勢は、多少演技が入っているようにも思えたが、とにかくフオロ―を優先した。

「そう悲観的にならないで下さい。仕方のない事です。……一昨日の奥さんの行動はわからないんですね？」

「はい。ただ……」そう言って続ける。「美智子は夜に散歩をする習慣があつたんです」

「それは何時頃ですか？」

「その日にもよりますが、だいたい八時くらいですね」

「その散歩のルートはわかりますか？」

「ええ、おおよそは。何度か行って行った事があるので」

伊勢は道案内を頼み、池田と三人でまわる事となった。まず、自宅を出た後に近くの森林公園へと向かい、遊歩道を進む。そして近くを流れる豊川の河川敷を歩く。

「ここだな」途中で伊勢が呟いた。

「何です？」信太郎が聞いた。池田も首を傾げている。

「いえ、何でもありません。引き続き案内して下さい」

そこはやや川幅が狭くなり、まわりの木々も無防備に生い茂った場所だった。加えて河川敷を上がり道路に出てみると、大きな通りからは外れた人通りの少ない道だった。民家も少ない。ここならば誰にも見られることなく犯行を実行できる。

「何なんですか、いったい？」池田が耳打ちで聞いてきた。

「あとで鑑識にここらを調べさせる」伊勢はそれだけ言った。

河川敷をしばらく進んだ後は道路に上がり、人通りの多い住宅街を進んだ。後は自宅に戻るだけのようだ。

「そういえば」池田がふと口を開いた。「奥さんが社長らしいですけど、あなたは何の役職なんですか？」

伊勢は徐々に池田に感心した。後で聞こうと思っていた事だった。「私は副社長です。変わっているでしょう？ 旦那の方が下なんですよ」信太郎は恥かしげに笑った。

「一体どういう経緯なんですか？」

「単に美智子が作った会社で、私はその後入った、それだけです。再婚ですから」

「再婚だったんですか？」

「ええ、二人とも二度目の結婚です。彼女の方は前の夫と死別したらしくて。僕は離婚なんですけど。お恥ずかしい」

「会社の方はあなたが引き継ぐんですか？」

「まあ、そうなるでしょうね。それが何か？」棘のある言い方になっただろうか、信太郎はやや不満げな表情で言った。

「いえ、興味があつただけです」伊勢は精一杯の作り笑顔で応じた。

翌日、伊勢は六本松夫婦についての報告を聞いた。

六本松美智子は十年前に夫と死別、子供はいない。信太郎とは五年前に再婚、同じく子供はなし。兄弟姉妹はなく両親も数年前に死去。

「相続権は信太郎一人、か」伊勢は机の隅に追いやつてあつたコーヒーに口をつける。

子なし、直系尊属なし、兄弟姉妹なしとなれば相続権があるのは配偶者の信太郎だけである。成功をおさめている企業の社長なら個人の財産も相当あるだろう。もちろん副社長の信太郎もだが。

続いて信太郎、四十九歳。十二年前に先妻と離婚。こちらも子はないが、姉が一人、弟が一人いる。

シックスパイン・ネットワークは美智子が六年前に起業、翌年に信太郎と再婚し、彼も入社するが当初はヒラ社員だった。しかし、もともと能力のある人物だったらしく、社長の夫という事もあつて副社長に落ち着いた。

保険金は大した額は掛かつていなかった。もつとも小説のように多額の保険金など掛けていたら、私が犯人ですと言っているようなものだ。

しかし、六本松美智子の財産が気になる。夫婦なのだから財産など二人で一つのようなものだろうが、再婚というのが気になる。もし財産を一人占めしようとしたら？

それに社長の美智子亡き今、会社は新太郎の物も同然だ。

「信太郎の一日の行動はウラが取れたか？」

「はい、取引先の社長と飲み歩いていたというのは本当らしいです。三軒ハシゴしてます。結構目立っていたみたいで、企業のお偉いさんだと言いまわっていたらしいですよ。」

よく行く店らしくて、他の客ともよく絡むので店員だけじゃなく覚えてくる客も多かったようです。

そんな感じで三軒ともしつかりと覚えられていてアリバイは完璧です」

その報告を聞くと伊勢は舌打ちした。

「もしかして伊勢さん、六本松信太郎を疑ってるんですか？」

「彼女が死んで一番得るのはあいつだ。再婚っていうのも怪しい」

「そんな事言ったら全国の再婚夫婦、全員怪しくなりますよ」池田が肩をすくめて言った。

「企業の社長とじゃ規模が違うだろう」伊勢は呆れ顔で池田を見つめた。「前の事件のときのアリバイは？」彼は思いつきで尋ねた。

「前のつて、どの事件です？」池田は首を傾げて聞いてきた。

「どのつて、そりゃあ……」そこまで言っただけでカルタについて気づいているのは自分だけだという事に気づいた。そこで、池田に説明をする。

「……確かに現場にカルタがあつたのは不自然ですけど、ちよつと弱くないですか？」池田は信じられないというように言った。

「ああ。だが次を待つわけにもいくまい。とりあえず、会議で提案してみるさ」

その日の午後、捜査会議にて伊勢は池田にした説明を繰り返した。現場でカルタが発見されていた事、被害者の苗字と発見現場がカルタと一致している事、つまりこれが何者かによる連続殺人ではないかという事。

何人は、現場でカルタが発見された事に疑問を持っていたし、そのさらに数人は名前の一致にも気がついてはいた。だが、結局のところそれだけでは何の説明もできないという事で誰も言わなかったようだ。

議論もたいして発展しなかった。最終的には「カルタが残されていたのは不自然で明らかに偶然ではないが、連続殺人と結びつけるには証拠が足りない」という曖昧なもので終わった。

「結局進みませんでしたね」

「ああ、だが予想通りだ。それにどのみちどうする事もできない。俺たちは次にどこで誰が殺されるのか知る由はないんだからな」

「でも、どうするんです？」

「とりあえず、二人の関係と、その関係者について調べる。アリバイもだ」

「二人の関係、ですか？」

「殺された二人には何らかの関係があったはずだろう。もちろん見え見えの関係ではないだろうな。そうすれば犯人が簡単にわかってしまう。そんな馬鹿はやらないだろう。それに関係がわからなくても、関係者の誰かが犯人である確率はかなり高いはずだ」

「伊勢さんの中では、六本松信太郎が第一候補なんですか？」

「今のところはな。伊東誠の方はどうなってる？」

「被害者の弟、信二というんですが、兄弟の仲はあまり良いものではないかったです。友人関係の方はまだ何も出てきてません」

「具体的には？」

「弟の方がガラが悪くて、よく金をせびっていたようです。ほとんどは断っていたそうですが」

「プー太郎か？」

「いわゆるそういうやつです。さらには借金もあつたみたいです」

「……わかった。そいつにも話を聞いてみる必要があるな」伊勢はコーヒーを飲み干した。それは午前中に淹れたもので、ひどくぬるかった。

三章 何をいつ、何時でしよう？ When do you tell him?

「なんじ」「と読まないでください……。」

1、

伊勢は自分の車の中からある一点を見つめていた。

ここはあるパチンコ店の前、駐車場の中の入り口に近い箇所に車を停めている。ある参考人に話を聞くためである。

幸いターゲットは入り口のすぐ近くの台で打っているため、監視は容易い。もつとも、見えなくとも出入り口はここしかないため逃げられる心配はない。

エンジンを切っているためエアコンが効かない。代わりに窓を全開にしているが、あいにく風がほとんど吹かない。玉のような汗が吹き出してくる。

「いやあ、暑いですね」池田がコンビニの袋を片手に助手席に乗り込んできた。中身は飲み物だけでなく、アイスも入っている。六十二円で買える最も売れている物だ。

本来、職務中に食べるものではないだろうが、誰も見てはいない。我慢しきれずに伊勢も池田からそれを受け取る。

「よく見つけたな。これ、かなり品薄らしいぞ」

「暑いですからね。そりゃ売れるでしょう。だって六十円ですよ？」

「猛暑の経済学ってやつか」

「なんすか、それ？」

「平均気温が一度上がると、千五百億円の経済効果があるらしい」

「へえ、そうなんですか」感心したのか、池田は頷きながらアイスを頼張る。

「ちなみに今年は平均気温が二・五度ほど高いらしい」

「日本、儲かっていますね」

「そうでもないぞ。特定の業界で見れば、儲かっているかもしれんが、日本全体でみるとそれほど大きくはない」

「どうしてです？ あ、当たり」池田は首を捻った後、当たりを見

て小さくガッツポーズをした。相変わらず古臭い仕草をするやつだ、と思う。

「何かを買う、という事は何かを犠牲にしているに過ぎない。アイヌが売れようが、ビールが売れようが、要はそのために例えば、新しい服を買うのを我慢したり、趣味の物を諦めたりしているだけだ。 ” 経済効果 ” という言葉はひどく曖昧だ。ある特定の分野で儲かっているだけで景気が良くなっているわけじゃない」

「へえ、よく知ってますね」

「……お前、どうやって警察に入った？」伊勢は呆れて物も言えなくなつた。そして、無駄口を聞いている場合ではないと思ひだし、店の方へと目を向ける。

「それにしても、昼間からパチンコですか」

「完全にプー太郎だな。どこから金を調達したんだか」

彼らが見ているのは伊東誠の弟、信二である。調べたところによると彼には借金があり、原因はもっぱらギャンブル。ギャンブルの負けを返すために借金をし、さらに負ける。ありがちな状況らしい。身を滅ぼすのは時間の問題、むしろもう滅ぼしていると言っても過言ではない。

昨年、大学を卒業したが就職活動で失敗、一つも内定を取れずに卒業。もともとやる気がなかったとの話もある。その気になれば留年して新卒扱いで再び就活をする手もあるが、そうしなかつた事、現状を見る限りでも現状を打開する気はないようだ。

「前の二件ではアリバイがないんだよな？」伊勢は池田に尋ねたが、彼はコーラを飲みながら呆けているところだった。いくら暑いとはいえ、職務中にだらけすぎだし、飲み物も不適切。伊勢は池田の頭に拳を一つ落とす。池田が頭を擦りながら蹲つたところで、低い声でもう一度尋ねる。

「つつ……。えと、そうです。一件目の時は自宅にいたと話していますが、彼は一人暮らしで、証人はいません。二件目はパチンコをしていたそうですが、そのパチンコ店で彼を覚えていた者はいませ

ん

伊勢はそれを聞くと黙って考え込む。

一件目はわかる。借金の無心に来たところを断られてカツとなった。そんなところだろう。しかし二件目はどうだ。利点はない。やはり、無関係の者を巻き込むことで自分と被害者たちの関係をわかりにくくしようとしたのだろうか？ それ以外にわざわざカルタをおく理由が思い至らない。あれは、それぞれが別の事件として扱われるのを防ぐためとしか思えない。

しかし、リスクが高すぎる。現に彼は警察に目をつけられ、アリバイも確保できていない。カモフラージュ作戦なんて、入れすぎた塩を誤魔化すために砂糖を加えるようなものだ。結局事態が悪化するだけ。

彼はシロだろうか？ やはり六本松信太郎か。しかし彼にはアリバイがある……。

他には……。カモフラージュではない何かがあるのだろうか？ 例えば、何かのメッセージ。しかし、不明瞭すぎる。現に警察も気づいていないし、カルタについては公表していないから警察以外にメッセージが届くことはない。この先、公表するような事態になるのだろうか。何らかのメッセージだった場合、公表するまで犯行を続けるという事も考えられる。どの時点で公表すべきだろうか。

「伊勢さん。出てきました」池田のその一言で思考を中断する。

伊東信二が出てくる。表情は芳しくない。一目で負けたとわかる。この状態で話を聞くのは困難ではないか。出直そうか。

しかし、時間を無駄にはできない。嘆息の後、伊勢は車のドアを開けた。

そこで、無線に連絡が入った。

2、

「えー！？ それ、ラノベじゃない！」奈美香が大声をあげた。

「いや、まあ、そうなんだけど。ミステリーとしてもちゃんとして

るよ」中井夏美が困ったような顔で言った。

ここはH大に近いアパートの一室で、中井夏美の部屋である。中井はH大の三年生で、奈美香とは昨年夏の夏に知り合った。ミステリが好きという事で意気投合したのだった。

今は平日水曜日の昼間だが、H大は開校記念日で休日、奈美香もたいして重要な授業はとっていないため（つまりサボリである）中井の部屋にお邪魔した次第である。

「三作目くらいからもはやファンタジーじゃない!」

「三作目はギリ、ミステリー」中井は苦笑いする。

「そもそも、名前が嫌だ。なんか“すもももも”みたいな人出てくるでしょ？ 現実感なさ過ぎ」奈美香は笑って話す。

「いたっけ？ ……ああ、いたね。全然主役級じゃないけど」中井もおかしかったようで、けらけらと笑っている。「けど、奈美香ちゃん好きなのこの作家だって」そう言って一冊の文庫本を手に取る。「結構、いろいろ言われてるじゃない。人物が描けてないとか」

「そんな事ないわよ」

「でも、あんな人たち現実にはいないよね。何か全体的にみんな賢すぎ」

「ああ、それは言ってる。けど、そんな非現実的だなんてどの小説でも一緒でしょ？ それにももの道理が描けてないよりはずっといいわよ。読んで、本当にできるの？ ってよくあるじゃない。けど、その点は心配ないわよ」

「そういえば、読者の公開実験とかあったね」

「人物だってね、魅力的よ。だいたい、現実にはないような小説の人物っていっぱいいるじゃない。『私を喜ばせる、犯罪の中でも最良のものはないのだろうか』なんて普通言わないわよ」

「誰それ？」

「適当に作った。ポアロあたりが言ってるじゃない」

「まあ、確実に言ってるね。でも古典と比べてもねえ。私は大好きだけ」

「古典の方が好きなの？」

「まあね。クイーンとポアロとか。どっちかっていうとクリステイの方が好きかな？」

「ホームズは？」

「嫌いじゃないけど、殺人が少ないんだよね」

「探偵小説には死体が絶対必要である。殺人より罪の軽い犯罪では不十分である」奈美香はテキストを棒読みしたような口調で言った。中井はそれが面白かったようで吹き出してしまった。

「ノックスの十戒？」

「違うわよ。そっちじゃない」

「あらら。あれってごっちゃになっちゃうんだよね」

「覚えなくていいわよ。あんなの」

「何か気に入らないみたいだね」

「別に」そう言っただけで奈美香は少し前のある女優の台詞と一緒に付いた。「ただ、十戒にしても二十則にしても、それを破った名作はたくさんあるし。それに、馬鹿にした内容が多いじゃない？ 超能力で解決しちゃいけないとか、未知の毒薬を使っちゃいけないとか、第六感で解決しちゃいけないとか。当たり前すぎて呆れるわ」「でもちゃんとしたのも書いてるよね？」

「まあね。手がかりはすべて明示されてなくちゃいけないとかはね。けど、明示されてるなら、犯人が端役の使用人だろうが、複数人だろうが、探偵だろうが、自殺だろうが、中国人だろうが、別にいいと思わない？」

「ずいぶん熱く語ってるね」中井は笑いながら言った。奈美香はそれを聞いて我に返り、顔を真っ赤にしている。

ふと、隣の部屋で何かの音がした。

「何？」

「さあ、昼間から男でも垂らし込んでるんじゃない？」

音は止まない。とはいえ、それ程大きな音ではない。防音がしっかりしているようだ。

「女の人なの？」

「ていうか、H大。四年生だからよく知らないけど、先輩の友達」
音が止み、今度は扉の開く音がして、すぐに閉まった。

「何か変じゃない？」

「気にしない、気にしない」

突然、携帯電話が鳴った。中井の物だ。

「もしもし。あ、おはようございます。はい、そうですけど……
え？ いや、でも……はい、わかりました、一応。はい、失礼し
ます」

「何？」

「いや、ちょっと」そう言って中井は立ち上がる。そのまま玄関へ
と向かう。奈美香もついて行く。

外に出ると隣の部屋に向かう。“橋本”とある。中井はドアベル
を鳴らす。

反応はない。

「橋本さん？」今度はドアをノックする。

「どうしたのよ？」先ほどから中井が何も答えないために苛立った
口調で尋ねた。

「先輩が、橋本さんの様子を見てくれって。何でかはわからないけ
ど、焦ってみたいで」

奈美香はドアノブを回してみる。するとすんなりと開いた。

「さつき、かけ忘れたのかな？」

先ほど何事もなく出て行っただけではないのだろうか。

多少の抵抗感があったものの、二人は中を覗き込む。何も無いよう
に思えたが、荒れているようだ。しかし、さすがに奥へと進む気
にはならなかった。

玄関の傘立ては倒され、壁にかけてあったであろうカレンダーが、
床に落ちている。奥の方はもっと荒れているように見えたが、玄関
からはよくわからなかった。

確かに何かあったようだ。しかし、どうするべきだろうか。

「あれ……」奈美香が困惑していると中井が奥を指をさす。短い廊下の奥はリビングだが、そこから人の足らしきものが見えた。奈美香が駆け出す。

「夏美、救急車！ 急いで！」奈美香が叫ぶ。

「え！？ う、うん！」中井は状況が飲み込めないようだったが、急いで指示に従った。

「警察も呼ばなきゃ……」中井が出て行った後、奈美香は一人で咳いた。

3、

「……次は誰だ？」彼は池田と共に車を降りた。眉間に皺を寄せ、たいそう重たい声で近くにいた部下の斎藤に尋ねた。

「橋本直美、二十二歳。H大の四年生です」斎藤が淡々と答えた。

長身で表情に乏しい男で常に不機嫌そうにしている男である。

「今度は学生か……」

「決まったわけじゃないですよ」池田は苛立った様子の伊勢を励ますように言った。

「ここはどこだ？」

「……はるかぜ荘です」おそろおそろ池田は答えた。すぐに伊勢が舌打ちをした。

「その内カルタも出てくる」

伊勢は部屋に入った。散乱した様子が見て取れる。廊下（狭いアパートなので廊下と呼べるかすら怪しいほど短い）の先のリビングはもっと荒れていた。部屋の中心のテーブルは不自然に隅に追いやられ、その上に載っていたであろうテレビのリモコンなどの小物が床に無造作に散っている。ゴミ箱も倒れて中身が出てしまっている。よほど争ったのだろう。その部屋のやや手前に被害者が倒れていた。「凶器は発見されていませんが、鈍器で殴られたようです」

「同じか……。第一発見者は？」

「隣の部屋の中井夏美、それとその友人です。話を聞きますか？」

「……………」

伊勢はしゃがみこみ、黙ったまま被害者を観察している。

「伊勢さん？」池田が伊勢を覗き込むように尋ねた。

「……ああ、すぐ行く」そう言っつて、先に池田を向かわせた。斎藤と二人で部屋を出ていく。伊勢の手には、カルタ。“花より団子”。被害者のポケットに入っていた。

伊勢はそれを握り潰したい欲求を抑えて、部屋を出て行った。

「すぐに話を聞けますよ」池田は部屋の外で待っていた。斎藤は再び部屋に戻っていく。伊勢は話を聞くために隣の部屋を訪ねる。

「道警の伊勢です。お話を伺いたいの、です、が……」最後の方は声が窄んでしまった。見知った顔がそこにあつたからだ。しかし、何というか、彼女は事件に憑かれてるのではないか。

「伊勢さん！」矢式奈美香だ。

「君か」

「ええ、ちょうど夏美さんの部屋にお邪魔してたんです」

「話を聞いてもいいかな？ 中井さんも」

二人が同意したので、話を進める。

「隣の部屋にはなぜ？」

「先輩から電話があつたんです」中井が説明した。「隣の橋本さんと友達なんですけど、様子を見てほしいって。よくわからなかったけど、切羽詰っているようだったんで」

「その先輩とは？」

「真田加奈さんです。連絡先を教えた方がいいですか？」

「ええ、お願いします」伊勢は彼女から真田加奈の連絡先を聞き、手帳にメモする。

「切羽詰っていたとはどういう事でしょうか？」

「とにかく様子が変だからとしか……」

「そうですね……。他に変わった事は？」

「音を聞きました」今度は奈美香が答える。「部屋に向かうほんの数分前です。このアパート、見た目以上に防音がしっかりしている

みたいで、よくはわからなかつたんですけど、今思えば、争っている音だったかもしれませんが。その後、ドアの開け閉めの音が聞こえました」

中井が「ボロアパートで悪かつたね」と呟くのが聞こえた。

「わかりました。またお話を伺うかもしれませんが」伊勢は部屋を後にする。出る直前に奈美香を呼んだ。

「何です？」

伊勢は思いつめた顔で言った。

「猪狩君に伝えてほしい事があるんだ」

4、

「真田さんが橋本さんと電話をしていたときに橋本さんの方でインターフォンが鳴ったそうなの。で、橋本さんが出て、『宅配便だからちょっと待って』って。それで電源を切らずにいたんだけど、大きな音がしてそれきり橋本さんが出ないから不安になったんだって」

ここは藤井基樹の家である。この部屋には矢式奈美香、猪狩康平、新川怜奈ともちろん家主の藤井基樹の四人がいる。彼は一人暮らしのため、頻繁に集会に使われるのである。リビングの真ん中に置いてある正方形のテーブルを囲むのが大抵である。今は藤井以外の三人が座っている。

集会の半分以上は飲み会に使われるのだが、今回はそうではない。奈美香は先日遭遇した事件のときに伊勢から聞いた情報と、その後やはり伊勢から聞いた情報を交えて、説明した。本来猪狩に伝えてくれとの事だったが、藤井と怜奈がいても問題はないだろうと判断した。

「で、これが連続殺人だつて？」藤井が台所から聞いてきた。彼は四人分の飲み物を用意している。

「ええ、現場にはカルタが残されていたわ。“いろは”の順で、被害者の名前も、現場の名前も“いろは”の順。カルタも同じものだ

「つたわ。もちろん同じ種類の製品だったっていうだけで同一の物はわからないけど」

「そもそも、何で？」 怜奈が腕を組んで考える仕草をした。

「そう、そこがちょっとわからない。一番の利点は異常な猟奇的殺人犯を創り上げて、無関係の人も殺す事で被害者との関係を希薄にする。つまり、本命が一個で後はカモフラージュってところかしら？」

「でも、リスク高すぎねえ？」 彼は四人分の麦茶をテーブルの上に乗せた。奈美香はお菓子を要求したが、睨まれただけで終わった。彼は貧乏学生なのでお菓子の常備などない。

「そう、犯人の意図がそこなら、関係者のアリバイを洗っていけばいい。この計画の弱点は自分が疑われたら終わり、ってところにあるのよ。アリバイを確保できないから」 奈美香はおもむろに立ち上がり、台所へと向かう。

「じゃあ、他に何かある？ って、オイ、コラ！」 奈美香が台所を物色し始めたのを見て藤井が声を荒げる。

「うーん、そうね……。なかなか思いつかないわね。今の話の延長で、どこかにアリバイトリックを織り交ぜているとか」 奈美香は藤井を無視して話を続ける。予想通り、特に目ぼしい物が見つからなかったので舌打ちをして席へ戻る。

「例えば？」 怜奈が二人のやり取りを見て微笑みながら尋ねた。

「それがわかったら苦労しないわよ。ところで、あんたは何かないの？」 奈美香は猪狩を睨むように見た。

「さあ？ 何も無いよ」

「ちょっとは考えなさいよ！」

「何で考えなきゃいけないのさ？」

「だって、康平に話してくれって、伊勢さんから聞いた話なんだから」

「え？」 猪狩は目を丸くする。「何で？」

「何でって……」 奈美香は額に手を当てた。呆れた、なんて無自覚、

無責任なのだろう。「まあいいわ。とにかく、何かないの？」

「うーん」猪狩は少し考えてから言った。「被害者たちに微妙な、普通はわからない関係があつて、その関係者が殺した」

「普通はわからない関係つて……。都合良過ぎでしょ！」

「都合が良過ぎたから、計画を実行した」猪狩は淡々と答えた。

「確かに、そういう考えもできるけど……」奈美香は釈然としなかった。どうにも納得できない。やはりそんな関係は普通は有り得ないのではないか。

「とにかく、今のままじゃ何もわからないし」猪狩はそこで言葉を切った。「やっぱり関わりたくない」

奈美香は猪狩を思いつきり睨んだ。

1、

アンティークな食器が詰まった食器棚、大きめのテレビにパソコン。テレビはどうせ地デジ対応なのだろうだろう。まったくもって贅沢だ。自分は（安くなる事を期待して）ギリギリまでねばっているというのに。

パソコンだって、未だにXPだ。数年で二代前になってしまった。おじいちゃんだ。浦島太郎か。

愚痴を言っても仕方がない。

とにかく、見たところ割と裕福な家庭のようだ。窓際には手入れされた観葉植物が所狭しと置かれているが、残念ながら伊勢は植物に興味が無いのでさっぱりわからなかった。

「事件の前の日曜日に、あなたは直美さんの部屋を訪ねたそうですね」

三人目の被害者、橋本直美の実家である。S市のはずれだが、H大まで一時間もかからず、通学にはさほど不便ではない。

事件後の聞き込みで被害者の友人を当たった結果、橋本直美は三年生までは自宅から通学していたらしい。それが、四年生になって父親と喧嘩、家で同然で一人暮らしを始めたらしい。

仕送りはもちろんなく、アルバイトを掛け持ちして生活していたようだ。さらには、授業料分と思われる貯金も見つかっている。本気で一人で暮らしていくつもりだったようだ。

すぐに戻ってくるかと踏んでいた両親も一カ月、二か月と経つにつれて、どうにかしなくては、となった。

どんな手を使ったかは知らないが（大学に問い合わせるだけで大事も何らかの措置を取るだろう。その他いくらでも手はある）、父親が彼女の部屋を見つけ連れ戻そうとしたのが、事件の三日前の日曜日。

伊勢はその父親と二人で話をしている。リビングのソファに腰掛け、テーブル越しに対面している。

「ええ、それが何か？ 事件とは関係ないでしょう」橋本直美の父、勉は憔悴しきった顔に精一杯の反抗心を見せて言った。「それより、早く犯人を見つけてください」

「わかっていきます。これもその一環です。その時の娘さんの様子はどうでしたか？」

喧嘩をしていた娘への怒りと、その娘が殺されてしまった悲しみが入り混じっているのだろう。勉は眉間に皺をよせ、怒っているよな、泣きそうな、そんな複雑な表情をしている。

「どうもこうも。ただ、『出てつてよ！』と。『顔も見たくない』と。ろくに話もできませんでした」

親子喧嘩にありがちなパターンとも言える。しかし、ここで「それは気の毒に」とは言えない。こちらもし事だ。この父親も容疑者の一人だ。

「つかぬ事をお聞きしますが、娘さんとは何があったのでしょうか？」

それを言った途端に勉の顔がより険しくなった。

「事件とは関係ないでしょう。ええ、娘と喧嘩をしていたのは認めます。ただ、その詳細を話す義務はないかと」

ここまで言われるとこれ以上は無理だと伊勢は判断する。さすがに「関係ないかどうかはこちらが判断します」とは言えないほどに機嫌を損なってしまった。単刀直入に聞きすぎた。焦っているかもしれない。

「すみません。失礼しました」

だが、まだ手はある。いくらでも。警察とはそういうものだ。

伊勢は橋本家を後にした。

2、

翌週木曜日、つらいつらいゼミの日である。猪狩は足取り重くゼ

ミ室に向かった。昔、野球部がタイヤにロープを括って引っ張っていく練習を見た事がある。心情的にはそれくらい重い。

ところが、ゼミ室に入ると深刻な顔つきの哀澤と、嬉しそうだが場をわきまえて抑え気味にしているゼミ生がいた。ポップコーンが弾ける前もこのような感じだろうか。

「さて、全員揃ったね」哀澤がゆっくりと言った。「今日は休講」猪狩は驚いた。哀澤はほとんど休講がない。学生総会の時ですら（学生総会は学生全員が参加する事を前提としているので授業は原則休講である）「君達出ないでしょ？」と言って、ゼミを行ったのだ。（全員参加が原則であるが委任状を出せば欠席は容易い。というよりも学生自治会や各部活の部長を除けば出席者は皆無に等しい）「何かあったんですか？」猪狩は驚きのあまり聞いてしまったが、何かないと休講にはならないだろう。

「うん、ちよつとね。通夜に。別にやってもいいんだけど、中途半端になるから、全部休講にしようと思って」

「親戚が亡くなったんですか？」

「いや、教え子というか……。僕はH大の非常勤講師をやってるんだけど、その一環である先生のゼミにお邪魔してるんだ。そのゼミの子がちよつとね。事件に巻き込まれたというか……」

「もしかして橋本直美ですか？」本当にそうだとしたら、大そうな偶然だ。しかし、あの事件以外にも事件があるとは思えない。そんなにポンポン事件が起きてたまるものか。世界は思っているより狭い。

「え！？ 知り合いかい？」いつもは澄ました顔でバツサリと学生の発表を切り捨てている哀澤だが、この時は驚きの表情が見て取れた。

「いえ、ちよつと」猪狩は言葉を濁した。先週の事件から時間が経っているのは司法解剖などがあつたせいだろう。

別段深く掘り下げる会話ではなかったし、暗い内容だ。他のゼミ生もいるため話せる事は特になかった。話が終わるころには、いつ

の間にか部屋にゼミ生は猪狩だけになっていたが、それでも話すことは特にない。

猪狩はすぐにゼミ室を出た。予想外に時間が空いてしまった。特にする事もない。いつものメンバーを待つにも長い。さてどうしようかと思っていると奈美香を見つけた。

「あら、めずらしい」

「お前こそ、ゼミは？」

「休講。なんと先生が風邪。あんたは？」

「同じく、休講」

「そんなのはわかるわよ！ 何でって聞いているの！」 奈美香は少し声を大きくして言った。そんなにムキになる事だろうか。確かに説明を省略しすぎた感は否めないが。

「通夜だと。しかも、橋本直美だ」

「え！？」 奈美香のその表情は哀澤が驚いた時と同じだった。

猪狩は、先ほど哀澤から直接聞いた情報を奈美香に伝えた。

「なるほど。……じゃあ、もしかして」 奈美香は何かをブツブツと呟いている。

「ああ、いたいた」 伊勢が正門の方から向かって来て片手を挙げた。

「あ、伊勢さん。こんにちは」 奈美香は微笑んだ。どうやら伊勢などの親しい大人向けの表情があるらしい。赤の他人向けの行儀の良い表情とも違う。猪狩は、最近その事に気が付いた。

「俺を探してたんですか？」

「うん、まあね」

「運が良かったですね」 そう言うと伊勢は首を傾げた。休講ではなかったら、あと数時間は会えなかっただろう。さすがに伊勢はこちらの時間割は把握していないようである。

「まあ、いいや。何か考えてくれたかい？」

「一つ質問があります」

「何だい？」

「どうい風吹き回しですか？」

「参ったな……。確かに君に頼るのは気が退けたんだけど、どうにも事件の展望が見えてこなくてさ。君なら何か思いつくと考えたわけさ」伊勢は心底申し訳なさそうだった。本当に気が退けているのだろうか。

「情報が足りません」

「もちろん、こちらの知っている事は教える。非公式だから漏れるとまずいけど。協力してくれないかな？」

「……聞くだけ聞いておきます」

「今日はずいぶんと乗り気じゃない？」奈美香が言ってきたが猪狩は無視した。奈美香は一瞬ムツとなったようだったが、すぐに伊勢の情報に思考を切り替えたようだ。

ここではまずいという事で伊勢の車に乗った。猪狩が助手席に、奈美香が後ろの席に座り、真ん中から顔を出している。そこで伊勢が話し出す。

伊藤誠の妻、葉月のDV疑惑、弟の信二の借金問題。六本松美智子の夫、信太郎の財産目当てと思われる再婚、さらには事件現場の状況についても話された。六本松美智子は散歩の途中で殺害されたらしい。河川敷の人目の少ない場所から彼女のものと思われる血痕が発見された。

話は三件目へと進む。橋本直美は父、勉と深刻な仲だったらしい。家出同然であるアパートに住んでいたらしい。

「僕が思うに六本松美智子の時だけ手が込んでいる」伊勢が言った。「一件目は三件目と同じ手口だろう。宅配便か何か、時間が遅いから何か他の口実かもしれないけど。それで扉を開けさせて殺害した。それに対して、二件目は散歩の途中をつけて、さらには遠くの公園まで運んでいる。どうも手が込んでいると思わないかい？」

「そうですね？」猪狩の返答は意外にも素っ気なかった。「まず、二つ仮定します。一つは、殺人犯がある人物を殺す為に他は力モフラージュで殺しているとします。二つ目に全ての被害者が偶然、つまり誰かのカモフラージュのために殺されたと仮定しましょう。矛

盾しますけど、要するにカモフラージュで殺され得るか、その検証です。

まず、一件目。奥さんの葉月さんが旅行に行っている事を知らなければ犯行はできません。二人とも殺すつもりだったなら別ですが、この一連の犯行を見る限りでは有り得ません。マンションのセキュリティは大したことはなさそうでしたから、難しい犯行ではないでしょう。

三件目も、彼女がH大生である日が開校記念日でなければ実行は難しかったでしょう。平日で彼女が部屋にいる、というよりは他の住人が部屋にいない、という状況が必要でした。一件目と違い、安っぽいアパート。防音はしっかりしていたそうですが、見た目はボロアパートみたいですし。一見わかりませんから、できれば音は出したくない。

隣もH大生でしたが、もしかしたら隣人は思いがけない休日にごここに出かけるかもしれない。多少リスクはありますが一人だけならいい方でしょう。もっと好条件なんてほとんど探せません」

「そもそもターゲットが出かけるかもしれない」

「それなら、次のチャンスを待つか、新たなターゲットを見つけるかです。そもそも偶然好条件のターゲットを見つけた、それだけですから、うまくいきそうになかったら諦めて他を探すだけです。」

「そうだとすると、二つ目は？」

「僕はこれが一番偶然殺され得ると思うんですけどね」

「意見の相違だな」

「まず、“ろ”で始まる苗字を思い浮かべて下さい」

「……………」

「あまり思いつかないでしょう。すぐに思いつくのは、S市在住でテレビなどにも出演している六本松美智子。“ろ”が付く地名もS市内では祿里だけです。“ろ”で始まる建物を探しても良いですが時間がかりすぎる。一番手っ取り早いのは祿里に持って行く事です。つまり“ろ”で始まる名前も場所も一つしか思いつかなかった。

そしてそのターゲットを調べてみると、毎晩散歩に出かける、おまけに人通りの少ない場所を通る。利用しない手はないでしょう。

何が言いたいかと言うと、カモフラージュで殺すにしても下調べをしっかりとって、ターゲットを絞り込むくらいしないと計画とは呼べないという事です。これら程度のこととは調べていたでしょう。一件目の旅行は調べるのが難しそうですが、おおかた旅行鞆を持って出かけるのを見つけた、といったあたりでしょう。ですから三人はいずれもカモフラージュで殺され得ると言えると思います。さらに本命だった場合はなお簡単でしょう。DV、金銭トラブル、遺産目当て、親子喧嘩……」

「なるほど、言われて見ればそうだが」

「もちろん六本松信太郎に目をつけるのは間違っていないと思います」

「そう思うかい？」

「ええ。ただ、他の人物も同じくらい目をつけないといけないだけです」

「なんだ、そういう事か」伊勢はがっくりと肩を落とした。

「嘘ですよ。それもありますけど。この計画を思いつくには“ろ”の存在が不可欠でしょう。“ろ”が事件の始点になったと考えるのはもつともです。

もちろん、テレビで見て思いついたのかもしれませんが、一概には言えません」

「あの、ひとついいですか？」今度は自分の番だと言わんばかりに、奈美香が口を開いた。

「警察は、“カモフラージュを含む犯行”の線で捜査を進めているんですか？」

「いや、そういうわけじゃないけど……」

「カモフラージュ説の他に可能性はすぐ思いつくもので二つあります。一つは猟奇的な殺人。これなら今のところ何も出てこないのも頷けます。もう一つは「奈美香は一度言葉を切った。前に康平に

言われた事なので、すごく言うのが癪なんですけど、被害者全員に何らかの関係があった場合です」

「それなら、警察がとっくに見つけている」

「そうですか？ 一人目の、えっと、伊東さん？ 彼は何の仕事をしていたんですか？」

「えっとね、食品会社の営業」伊勢は確認する事なく、淀みなく答える。

「違うか……。じゃあ、もしかして、工業系の大学か、〇大の出身じゃないですか？」しばらく考えた後、再び質問する。

「ん？ ちよつと待ってね」今度は手帳を取り出し、確認する。「うん。〇大だね。三年前に卒業しているけど？」

「やっぱり。でもこの先はまだ調べないと……」

「何を？」

「秘密です」そう言って奈美香は人差し指を唇に当て、にっこりと微笑んだ。

猪狩は遠くに視線をやり、少し考えにふけた。二人から見ればぼうつとしているように見えるかもしれない。

「今のところ、目ぼしい容疑者は四人だけですか？」しばらくして猪狩は口を開いた。

「うん。今のところはね」

「彼らのアリバイは？」

「完璧じゃないけど所々で成立している。伊東葉月は夫の事件の時、函館にいた。これは間違いない。考えにくいけど友人が共犯、つまり伊東葉月が函館にいたと嘘の証言をしたという可能性も検討したけれど、ホテルの従業員が伊東葉月を覚えていた。

二件目は薄いけど、三件目は結構がっちりしているよ。料理教室に通っていたんだ。

次に伊東信二。一件目と二件目は全然。だけど三件目はパチンコ店にいた。僕自身が目撃している。

橋本勉は一件目にアリバイがない。三件目は昼間だしもちろん会

社にいた。二件目も会社において残業だったそう。数人の証言が取れている。一件目は自宅にいたらしいけどそれじゃアリバイにならない。

で、六本松信太郎。実は二件目しかアリバイがない。さっき言った通りある企業の重役と飲み歩いている。ただ、その他のアリバイはないようなものだ。これさえ崩せれば……」

「六本松信太郎にこだわりますね」奈美香が伊勢に向かって微笑んだ。

「あの目が気に入らない」伊勢はそれだけ言っただけで不機嫌そうに黙りこんだ。

「例えば……」猪狩が口を開く。「今回の事件、名前の他に場所に重要な意味があります。死体のあった場所です。どこで殺されたかは実際のところ関係がない。どういう理由かは知りませんが……」

「ABCの真似事じゃない？」

「何それ？」

「あんだ、クリステイの名作を知らないの？」

「それどころかクリステイも知らない」

「うわあ！ 無知、馬鹿、変態、信じらんないっ！！」奈美香は前の席まで突き出して顔を引き締め、狭い車内を後ずさるようにして、背もたれにもたれかかるまで下がった。首を左右に大きく振った後、目を細めて猪狩を見る。

「うるさい。言いつすぎだ」猪狩は声を低くして言った。変態とまで言われたのが気に入らなかつた。「で、結局何だよ？」

「Aで始まる街で、Aで始まる人が殺されるの。現場にはABC鉄道案内。それでB・C・Dと順に殺されていくわけ。ってかABCも知らないでカモフラージュとか言ってたわけ？」

「ふうん。確かに似てるな」奈美香の言葉の後半は無視した。「今回は街じゃなくて街の中の施設名だから規模は小さいけど。でも、だとすると、小説と同じトリックではないだろうね。」

話を戻します。要はどこで殺してもいいんです。河川敷の血痕だ

つて、血さえあればいい。問題はいつ人の目を盗んで殺すことができたか。もちろん信太郎が犯人ならの話ですけど」

「……信太郎が席を外した時間をもっと詳しく調べてみよう」

「ついでにもう一つ。伊東信二は三件目の時にアリバイがあるようですが、奈美香が聞いたのは音だけです。争うような音、物が散乱するような音、ドアが閉まるような音。何かの細工をすれば何とかなりそうじゃないですか？ まあ、隣で音を聞いている人ありきの話ですし、仕掛けの回収をどうやったかが問題です。可能性は低いでしょうが参考までに」

「十分だ。ありがとう」

その時、伊勢の携帯が鳴った。

「もしもし、ああ……そうか、わかった。すぐ行く」伊勢は通話を終えると舌打ちした。

「四人目だ」

3、

伊勢が現場に到着すると既に池田がいた。彼は現場の到着だけは早い。仕事もそのくらいこなして欲しいものだ。

場所はヒルマンホテル。

「……“ひ”？」

疑問を感じながらも連絡を受けた部屋へと向かう。十階の一〇二九号室。何の変哲もない普通のホテルの部屋。そのテーブルにはワインボトルとグラスが置かれている。その付近に彼は倒れていた。表情は苦渋に満ちている。

「……何かの間違いか？」伊勢はその場の状況を飲み込めなかった。思わず頭を掻きむしった。「こいつは六本松信太郎じゃないか」

「ええ、間違いなく彼です」池田も何が何やらといった感じでお手上げのポーズをしている。

「これも一連の事件だったか？」

「テーブルの上を見てください」池田に促されてテーブルを見ると、

そこにはやはりカルタがあった。

“憎まれっ子世にはばかる”

信太郎が憎まれっ子だったかは知らないが、伊勢には何となくこの状況が皮肉に思えた。状況は全く逆だが、そういうやつに限って最後は転落するではないか。

「外傷が見当たらないが？」

「はい。どうやら毒殺じゃないかと」

おそらくワインだろう。

状況が違いすぎる。どうにも一連の事件とは思えない。場所が“に”ではない。殺害方法も今までは撲殺だったのに対して、今回は毒殺。

しかし、カルタがある。模倣犯ではない。カルタの話は世間には伏せている。模倣犯を防ぐためだ。

「部屋の名義は？」

「信太郎本人です」

「目撃情報があればいいが……」そうは言ったものの、期待はできない。犯人は人目につかないように部屋まで来ただろう。非常口から入ったかもしれないし、堂々と正面から入っても誰も気に留めないだろう。

「……待てよ」伊勢にある疑問が浮かんだ。

「なぜ彼は部屋を取ったんだ？」

4、

「……というわけなんだ」日曜日、伊勢は猪狩に電話をかけた。

捜査は行き詰まっている。と言うには事件は始まったばかり（最後の事件に関しては、だが）とはいえ、今のところ別段有力な情報は入っていない。

「犯行現場が見たいです」猪狩は歯切れ良く淡々と言った。

「見せたいのは山々だけどねえ……。どこの？ 最初の事件はもう返しちゃったし、二件目はいいとして、三件目は、まあ、なんとか

なるかな？ 遺族に遺品回収は待ってもらってるから。けど四件目はまだ捜査員でいっぱいだよ。」そもそも、あくまでこの会話も非公式に協力を求めているのであって、堂々とした行動はできない。「現場の写真はありますか？ 最初の事件の。最初に覗き込んだ時にリビングまで見えましたけど、肝心の寝室は見えませんでしたから。三件目もなんとか見たいです。写真だけでもいいです。二件目と四件目はいりません」

「ああ、それならなんとかできるかな。三件目の現場も見せれる。けどいいのかい？ 全部見なくて」

「ええ、大丈夫です」

すぐに迎えに行くと言って、電話を切る。一件目の現場の写真を用意して、迎えの準備をする。

「おはようございます」猪狩は抑揚のない声で言った。

「おはよう。さ、乗って」

猪狩を乗せると伊勢は車を発進させる。そして、四件目の概要を話した。

「一応、信太郎が部屋を取っていたのは商談のためだったらしい。つまり、私的なものではない。これは会社の秘書に聞いた話だ。だけど、どこの企業かは言わなかったらしい。

つまり、当てにならない。秘書にも言わないうつのはちょっとおかしくないかい？」

「まあ、そうですね」猪狩はたいして興味なさそうに相槌を打った。

「それとあと一つ。彼の旧姓は“仁原”だったらしい」

「へえ。婿養子だったんですか」

「そこ？」伊勢は笑ったが、どうも拍子抜けしてしまった。「やはり、偶然かな？」

「さあ？」

「考えたんだけど」伊勢は運転しながら猪狩の様子を横目に見た。真っ直ぐ前を見て、何を考えているのかわからない。「今回、犯人

は今までとは別人で、名前が“に”から始まったんじゃないかな？」
「どうでしょうか？」

「つまり、今までの犯人が六本松信太郎で、今回も“に”の人物を殺そうとしたら、逆に殺されてしまった」

「毒薬は、準備しないと無理ですよ」

「そう、犯人は、信太郎が怪しいと思っていた。そこへ彼からの呼び出し、これは何かあると思った。という事で今回の犯人は信太郎の近辺の人物だ」

「伊勢さん、焦っていますね」

「焦る？」

「いつもの伊勢さんなら、そんな馬鹿馬鹿しい推理はしないでしよう」

「駄目かい？」伊勢は苦笑した。

「カルタの情報は伏せているんですよ？　ならテーブルの上にあったのはおかしい。カルタがなければ、今までの事件が連続殺人だと結びつけるのは一般人には難しいでしょう。仮に信太郎が持っていたのを見つけてもそれをテーブルに置こうとは思いませんよ。」

それに、彼が犯人だとして、二件目のアリバイはまだ崩せていないんですね？　そしてこれが一番重要なことです。彼はどうやって、運ぶ気だったんでしょうか？」

「運ぶ？　……あ」

「現場はヒルマンホテルの十階です。彼が犯人なら、“に”の場所を選ぶか、移動し易い場所にしたはずですよ」

伊勢はため息をついた。「確かに焦っているな……」

5、

奈美香は相変わらずの惨状に閉口した。何をどうすればこうなるのだろうか。空きだらけの本棚に、床に散々した本。この組合せはおかしいだろう。それに、いい加減にコーヒーク缶とカップ麺容器は捨ててほしい。

「どうにかならないの？」いらいらした口調で奈美香は訴えた。

「心配してくれるなら、代わりにやってくれないかな？」木村良知准教授が朝起きたばかりのような寝癖頭を無理矢理手で梳きながら言った。もちろん寝癖が直るわけではない。

「心配じゃなくて、苦情」

奈美香が教員にこのような態度をとっているのは、木村が従兄だからである。さらに、木村がこのようにズボラな性格であるため、年齢に対して奈美香の方がアドバンテージが大きい。

「で、今日は何の用？」結局部屋の状態については解決せずに、木村が本題を促した。

「良兄、伊東誠っていう人知ってる？」

「伊藤真？」

「伊東は東の方、誠は誠実の誠。三年前の学生なんだけど」

「さあ？ 僕のゼミ生ではないね。どうかしたの？ また、何か事件に首を突っ込んでいるの？」

「ええ、まあ。もし彼が経営情報学科だったりすると、被害者が情報学で繋がるのよ」

「なに、連続殺人なの？」

「一人目は彼、二人目は六本松美智子」

「ああ、知ってるよ。IT会社の社長だろう？ 確かに情報学の分野でもそれなりに著名だね」

著名とは、それなりではないから著名というのではないか、と思っただが口にはしなかった。日本語なんてそんなものだ。日本人ほど母国語が苦手な民族はいないのではないか。

「三人目は哀澤先生の通っているH大のゼミ生」奈美香は思考を元に戻し、話を続ける。

「うん。哀澤先生はH大の情報学のゼミにお邪魔してるってのを聞いたね」

「四人目は六本松信太郎。二人目と一緒にね」

「それで僕のところに来たんだ？」木村も経営情報学科で、哀澤と

研究分野が似ている。「でもさあ。情報学で繋がっていたって、何か関係あるの？ 特定の人と繋がりがあつたわけでもないでしょ？

一人目なんて関係してるかすら怪しい」

一瞬、奈美香の動きが止まった。

「それは、これから調べるわ」

1、

「ああ、そうそう。一人目の伊東誠なんだけど」

伊勢の推理が頓挫した後、しばらく沈黙が続いていた。それを破ったのはやはり伊勢だった。猪狩に沈黙を破るような会話術はない。それに、沈黙が続いたところで居心地が悪くなったりしない。「矢式さんが何か言ってたから、ちよつと詳しく調べたんだよ。」

三年前に〇大を卒業。経済学科から三年時に商学科に転科している。浪人・留年ともなく、成績は普通だね。可と良ばかりだけど三年時にほとんど卒業所要単位を取り終えていて、四年時には数単位しか履修していない。ゼミの先生は村中由規」

「ああ、商学科の先生ですね。まあ、そんなところだろうとは思ってましたけど」

「どういう事?」

「何の意味もない、という事です」

「まあ、いいや。これが一件目の現場写真」信号待ちの間に伊勢が鞆から写真の束を取り出して猪狩に渡した。猪狩はそれをパラパラとめくるように見る。

「あ、これ僕の先生の授業の教科書なんです」猪狩が一枚の本棚が写った写真を指差して言う。「奈美香は惜しいけど、結局意味がないですね。でも一応教えておこうか」

伊勢が首を傾げるのには構わず、すぐに見終わり次の信号で伊勢に渡す。

「もう大丈夫です。想像どおりでした」

「もう、何かわかつているのかい?」写真を鞆に戻しながら、微笑むように伊勢が尋ねる。

「まだ、これからですよ」

三件目の現場に到着した。奈美香から聞いていた通り、お世辞に

も綺麗なアパートとは言い難い。橋本直美の部屋の入り口には刑事ドラマでおなじみの黄色いテープが張られていたが、警官の姿は見られなかった。

「事件が起こりすぎて、人員が足りないんだよ」

部屋の中は荒らされていた様子が見て取れるが、特にリビングなどはこれまた刑事ドラマでおなじみの数字が書かれた黒い板が床に大量に置かれていて、現物はなかった。

「何が置いてあったかはすぐわかるけど」

猪狩は伊勢の言葉に反応しない。リビングから玄関を見つめ、比較するかのように今度はリビングを見渡す、そしておもむろに玄関の方に歩いていき、今度はそちらからリビングを見つめる。

「行きましょう」

「もういいの？」伊勢は苦笑している。猪狩の見切りが早すぎると思ったのだろう。

別に自分にとってはどうでも良い事なのだが、頼られている身だし、こうやって現場を見せてもらったり（正確には見せられているに近い）しているので、最低限の義務（義務かどうかは怪しいところだが）は果たそうと思う。

「だいたい、わかりました」

2、

数日振りに四人は藤井の家に集まった。前回の反省を踏まえ、事前にコンビニでお菓子などを買い込んできた。今日も酒を飲む予定はない。一人暮らして金欠ぎみの藤井の要望だ。

自然と話題は連続殺人事件になっていく。

「でも、先生の言うとおり情報学ってだけじゃどうにもできないだろ」何やら自信ありげな奈美香の仮説を聞いた後に藤井が言った。

「一人目は結局どうだったの？」怜奈が尋ねる。

「家に哀澤先生の教科書があった」奈美香の代わりに猪狩が答えた。これはここに集まる前に奈美香に教えておいた事だ。その時の奈美

香の顔は満足げだったが……。

「そう、実は一件目と三件目に哀澤先生が関わってきてるのよ。これで六本松夫婦にも接点があれば……」

「あれば、結局どうなんだよ？ 哀澤先生が犯人だったか？」

「うーん。何だろ？ 何かないかしら」

「何もないと思うよ」猪狩が言った。

「何で言い切れるの？」

「言い切ってる」

「いいから」奈美香は猪狩を睨みつける。

「俺の仮説が別の方向だっただけ」

「え？ もうわかってるの？」怜奈が目を見開いた。

「いつつもそうやって黙ってる」藤井が苦笑する。

「いいじゃない、聞かせなさいよ」奈美香はテーブルに肘をついて、顎を手に乗せて細目で猪狩を見つめる。

「……面倒くさいなあ」猪狩はため息をつきながらも話し出した。

「一応伊勢さんには言ったんだけど。あくまで仮説ね。」

あ、そうそう。その前に、情報学繋がりにってというのは間違いって事は言っておこう。一件目の伊東誠は確かに哀澤先生の教科書を持ってたけど、あれは授業の教科書だし、うちの大学は他学科の授業も普通に取れるのは知ってるよな？ 実際、伊東さんは商学科だったし。だいたい、奈美香だって商学科のくせに木村先生の授業取ってるだろ？」

そこまで言うとな美香の「げっ」という声と舌打ちが聞こえた。

「げっ」というのはあまりにも古典的で漫画的だし、少なくとも女性が言う言葉ではないと思うが、とりあえず無視した。

「まず、第四の事件から考えるよ。あの事件だけ他と違いすぎる。つまり今までの事件とは性質が別だ」

「模倣犯か？」

「そうじゃない。警察は今回の事件に関して、模倣犯を避けるために情報は極力隠してきた。だから模倣犯は有り得ないけど、それで

いて今までの事件とは違う。場所がおかしい。手口もおかしい。名前もおかしい。しかし、カルタはある。これが意味するところは何だろうか」

「何なの？」

「つまり、そうする必要がなくなったという事。それでいて別の事件とされては困る、実の所困らないんだけど、とにかくそれでカルタだけは残した。ここで終点という意味だ。そもそも、この一連の事件、カルタを残す事で何のメリットがあると思う？」

「殺したい相手以外を無作為に抽出する事で、被害者間の関係を曖昧にする。いわゆるカモフラージュ」奈美香がテキパキと答える。

「そうじゃない。一番の利点は一人の猟奇的殺人犯、もしくはカモフラージュ作戦を遂行する一人の計画犯と思わせる事だ」

「え！？ あ……え？」

「なぜ六本松信太郎があのように殺されたかというと、ターゲットじゃないから。ターゲットじゃないのになぜ殺されたかという、彼が犯人で、共犯者に殺されたから。」

おそらく信太郎の犯行は一件目と三件目。自分が殺したい相手の時にしつかりとアリバイを作っておかなきゃいけない。二件目が共犯者。もちろん四件目もね」

「じゃあ、共犯者っていうのは……」

「一件目と三件目にアリバイがある人物」

「……伊東葉月ね」奈美香が呟く。

「そういう事。ただ、主犯は信太郎の方だと思うよ。『後で殺すんで先に殺して下さい』ってのはちょっと考えにくい。二人の接点がどれくらいあったかによるけど。」

信太郎が殺された理由もいくつか考えられるね。例えば、伊東葉月は交換殺人で良かった。けれど信太郎はそれでは満足しなかった。ついに三人目を殺してしまった。四人目を殺したくなかったからかわりに信太郎を殺した、とか。

彼女が主犯で、口封じに殺したっていうのもありっちゃありだけ

ど、もし彼女がこの計画を最後まで遂げた後で口封じに信太郎を殺そうとしていたとすると、三人じゃちよつと足りない気がするんだよね。あ、そうだ。ABCでは何人殺された？」猪狩は奈美香に尋ねる。

「え？ えつと……五人かな？」

「やつぱり、三人だと少ないな。何にせよ、伊東葉月は四人目を殺す気はなかった。その代わりに信太郎を殺した。口封じっていうよりは主犯への抵抗のような気がするんだよね。実際どうかはしらないけど」

「けど、伊東葉月が犯人だっていうのはアリバイがあるからってだけでしょ？ ちよつと不十分じゃない？」

「一件目と三件目は同じようで実は全然違う。三件目の時は現場が荒らされていたけど、一件目はほとんど荒らされていなかった。

宅配便でも何でもいいけど、とにかく扉を開けさせた後は絶対に争いになる。どう見ても宅配便じゃない、不審者だ。ってなるはずなのに寝室まで何も荒らされていないのはおかしい。

つまり犯人、信太郎はあの部屋の合鍵を持っていたんだ。鍵を開けてこつそり入って襲ったか、もしくは先に入って待ち伏せしたか。そう考えれば辻褄が合う。伊東誠の時は確実に殺すための方法を取った。つまり橋本直美じゃなくて彼の方が本命」

「結局、カルタ自体に意味はないの？」

「ああ、一人の連続殺人犯であると認識させるためにたまたま使ったのがカルタだったっていうだけ。例えば自分たちの殺したい相手が秋本と江川とかだったら、そうだな……辞書でも残したんじゃないかな？ あれって五十音順だから。で、”い”と”う”を探してって感じだったと思うよ。出費がかさむけど」

最後はジョークのつもりだったが誰も笑わなかった。慣れない事をするものじゃないかと反省する。

「ふーん。なるほどねえ」奈美香はいつの間にか缶ビールを空けている。

「あつ！ ちょ、それ、俺のビール！」藤井は驚いてテーブルをバ
ンと叩く。強すぎたのか、手をヒラヒラと振って苦い表情をしてい
る。

「いいじゃない、別に」奈美香は横目で彼を見ただけで気にしたよ
うでもなく、そのままビールを飲む。

「待て待て！ ビールなんだぞ。発泡酒じゃないんだぞ。第三のビ
ールじゃないんだぞ。高いんだぞ！」

「気にしない気にしない。いつもみんな飲んでるじゃない」

「そんな時はみんなで金出してやるだろ！ それは俺のだ！」藤井は奈
美香の手からビールを奪い取るうとするが、奈美香は軽々とそれを
かわす。藤井も女相手に思いつき掴みかかる事ができないでいる
ようだった。しまいにはテーブルの角に足の小指をぶつけ悶絶して
しまった。

「あ、チューハイもある。もうらい」怜奈もちゃっかり冷蔵庫を物
色している。

「おい、こら！ お前ら金払え！」藤井が涙目で訴えるが（この涙
目の意味はどちらだろう）、二人は素知らぬ顔で酒を嗜んでいる。

「私、今月お金ないのよ」

「私も」

「俺だつて金ねえんだ！ 一人暮らしなめんなー！」

猪狩はそんなやり取りを微笑ましく傍観していた。大学に入った
頃ならくだらないと一蹴していただろう。

この変化は何なのか。深く考えるのはよそう。人間は変わるのが
常なのだ。何かしらを通して日々新しい自分になっていくのだ。

「新川、俺の分も取ってくれ」

どうしてこうなったのだったか。

「一緒にしてもよろしいですか？」

そう、たしかどこかのバーで友人と飲んでいた時だ。暴力に悩んでいて憂鬱な時期で、顔に出ていたのだろう、何も知らない友人が、何も聞かずに気分転換にと誘ってくれた。

彼女は最後まで何も知らなかった。その方がよかったのだろう。そこで口を挟んできたのがあいつだ。少し離れた席からこっちに寄ってきて話しかけてきた。何人かやってきたが、誰もが企業のお偉いさんだった。

彼女はお金持ちで副社長のあいつに多少なり騒いでいたが、私は嫌いだった。目が恐かった。

その場で適当に盛り上がって、別れた。もう二度と会わないだろうと思った。

「おや？ また会いましたね」

あろうことか、またあいつと出会ってしまった。本当に偶然だった、と思っていた。でも今考えれば、あいつが仕組んだ事なのだろう。もしかしてつけ回されていたのだろうか。そう考えるとぞっとする。

「その怪我、もしかして……」

あいつは見抜いていた。そもそもこれに気づいたからこそ話しかけてきたのだ。やはりあの目は嫌だった。その目で何もかも射抜いていた。それでも私はその頃もまだ暴力で思い悩んでいたので、つ

い相談してしまった。

「じゃあ、いつそ殺してみせましょうか？」

「何度か相談した後だ。最初は何を言っているのかわからなかった。何を狙っているのかもわからなかった。虫の良すぎる話だ。」

「いえ、私にもお願いがあるのですよ」

「私にも殺せ、と。もう退けなかった。そうしたら私が殺されてしまつと、そう直感した。」

「実際、主人が死んで救われるのは事実だった。」

「私はあいつに部屋の合鍵を渡した。」

「そりゃあ、ただの交換殺人じゃ意味がないのですよ。猟奇的な犯人の無差別殺人と違ってもらわなくては。そのためには二人じゃ足りないのですよ。三人でも少ない。言っている意味がわかりますね？」

「三人目の後だった。私はこの時ほど背中に悪寒を覚えた時はない。こいつを殺そう。そう思ったら、背中だけじゃなく、全身が寒くなった。冷たくなった。」

「もう自分は人間じゃない。もう戻れない。せめてあいつと一緒にだけは……。」

「ドアフォンが鳴る音がする。私はゆっくりと立ち上がり、応答した。」

「道警の伊勢です。少しお話を伺いたいのですが」
来た。ついに。私も裁かれるのだ。

もう、疲れた。彼が気づいていようがいまいが、もう終わりにしよう。

これで自由だ。不自由という名の自由。警察に縛られ、社会に縛られ、そして自由になる。何かに縛られる事で得られる安定。そんな意味での自由。

こんな、いつ破裂するかわからない、いつ萎むかわからない、そんな風船みたいにふわふわ浮いた状態なんて自由とは呼べない。

こうなったのは自分のせいだ。ならば甘んじて受け入れよう。これは自由になるための通過儀礼。

私はゆっくりとドアを開けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4576n/>

裁断のイニシエーション

2010年10月8日13時48分発行